

パリ断章 1994-1995 (Ⅱ)

山中哲夫

XCVII

モンパルナス駅前の広場でまわっているメリーゴーラウンドをながめる。少女が一人乗っている。広場で動いているのはこれだけ。広場の噴水のようにいつまでも同じ動きを繰り返す。ふと、ブリュッセルの回転木馬を歌ったヴェルレーヌの詩を思い出す。ランボーとの「恋の逃避行」の果てに行き着いた町での、流謫の身となったヴェルレーヌの放心した目を想像する。楽しかるべき公園の回転木馬の情景を、あれほど哀感をこめて歌った詩はない。「まわれ、まわれ」というルフランは、あれは己の運命に向けて放った呪詛ではあるまいか。わたしの前方で相変らずメリーゴーラウンドは同じ速度でまわりつづけている。相変らず、たった一人の少女を乗せたまま。

XCVIII

パリで、一人でレストランに入ると、風が吹き込む寒い入口近くの席か、奥のトイレに近い、グラスが垂れ下がった暗い席に案内される。ギャルソンがきて、テーブルに用意されていた二人用のグラスの一方をさっと片づける。自分が一人であることを思い知らされる。食事に一人で入るのは日本人だけだ。それも男だけ。男は一人で黙々と食べ、さっさと出てゆく。フランスではこれは食事とは言わない。動物が餌を食らっているのと同じ。フランス人に人気のある日本人女性はいつも誘われて、男性たちと一緒に入る。韓国人男性は同性の同国人たちと入る。信号待ちのバスの窓などか

から見かける、ファーストフードの店で一人食べている東洋人の男性は、必ず日本人だった。自分の姿を見る思いだった。

XCIX

フォンテーヌブロー駅から自転車で町を走り抜け、瀟洒な宮殿を見物したあと、広大な森に入る。にわかには冷気が身を包む。鬱蒼としたブナの原生林、くねくねとつづく白い一本道。行き交う人はいない。友人はバルビゾン村へゆき、わたしは徹夜の疲れた体を、森の空き地の片隅に投げ出す。仰向けに寝ると、樹木の間から青空が見える。静寂の中で、十一年前の南仏アヴィニョンでの、若いフランス人娘との会話を思い出す——「ケ・ス・ク・ヴー・フェット？」（何をしていますか？）「ジュ・シェルシュ・ムッシュー・マラルメ」（マラルメ氏を探しています）「イ・ラ・ディスパリュ・イ・リ・ヤ・ロンタン」（彼はずっと昔に亡くなりました）変な話だが、その言葉で、わたしははじめてマラルメの死を納得したものだ。彼の終焉の地は、この森の向こう側にある。思えば、この森はまた、マラルメが妻となるマリーとはじめて出会った場所でもあった。その森にわたしは寝ている。背中がどんどん冷えてくる。青空が高く美しい。

C

ルーアンから戻ってきて、サン＝ラザール駅のプラットホームに降り立ったとき、ある臭いに気がついた。何の臭いなのかははっきりとは分からないが、この駅界隈の臭いでないことは確かだった。シャルトルから戻ってモンパルナス駅に降り立ったときも、南仏から戻ってリヨン駅に降り立ったときも、この臭いがしたからだ。甘酸っぱいような、醋えたような、何とも言えない臭いだった。こんな臭いは地方では感じなかった。この臭いは、パリ独特の生活の臭いらしかった。かつて金子光晴が、パリには一種独特の臭いがする、街の体臭のような異様な臭いがする、と語っていたの

を思い出した。いきものようなパリの街をよく言い当てた言葉だ。ゾラの世界がまだここでは生きつづけている。ゾラの時代以上に、ここには錯綜した人種や民族の喜怒哀楽が底流のように流れている。これを描ける作家は現代にはいない。

CI

昼も夜も酒を飲む。カラオケバーの中国人娘クリスから、ウイスキーは強くて体に毒だからやめなさいと忠告される。この国でアルコール中毒になるのはいとも簡単なことだ。フランス人は仲間たちと食事をしながら酒を飲む。談笑し、議論しながら陽気に楽しむ。酔っ払うということはない。日本人は一人で黙々と酒を飲む。酔っ払うために酒を飲む。何かを忘れるために。異国にいることを忘れるためか。日本に帰れぬ、あるいは日本人に戻れぬために、そのことを忘れるために飲むのか。わたしには分からない。しかし一人飲んで泥酔している日本人を咎める気持にはなれない。彼らはずっと「あること」を忘れるために飲んでいるのだから。日本にいるときよりも、数百倍も強烈に。

CII

いつもの水曜日の午後、可愛いベレ帽を被ってソフィーがやってきた。彼女はパリ大学の日本語科の女子学生。彼女はわたしと日本語で会話し、わたしは彼女とフランス語で会話する。互いが互いの先生であり生徒。フランスにおけるカトリシズムの衰退について話す。自分のような若者が日曜日にミサに行くのは現代ではめずらしいことになったと言った。フランスは（特にパリは）いまや完全に無宗教の国（都市）に変わってしまった。麻薬、売春、失業、テロリズム……。若者を取り巻く現在の環境。その中で、ソフィーは中世がいまも息づくディジョンの出身者らしく、自分の心のうちに決して汚されない「美しい魂」を持ちつづけようとしている。

CIII

孤独と連帯。本来は互いに異質なものであるはずのこの二つが、この国では奇妙に結び合っている。パリの孤独は凄まじい。どれほどの老人がアパルトマンで人知れずひっそりと死んでゆくことか。この孤独に耐えられない者は、アル中になるか、精神病者になるか、なおまだ理性が残っているなら、セーヌ川に身を投げるか、そのいずれかだ。それにもかかわらず、というより、それゆえにこそ、目に見えないところで連帯意識が底流のように流れている。それは、病者や貧者への援助であり、共同で行ってやる葬式である。救いはない。しかし慰めにはなる。モルヒネのように。この連帯意識を体感できるほど日本人は絶望のどん底に落ちていない。孤独の辛酸を舐めずしてこの連帯は得られない。

CIV

R E R のB線車内。午後九時半頃。列車がダンフェール＝ロシュローとポール・ロワイヤルの間にさしかかったとき、いきなり目の前にジーンズ姿の女子学生風の娘が現われて、向かいの座席にすわるや早口に、こちらに真剣（そう）な口調で訴えかけてきた。わたしはめずらしく背広にネクタイ姿で、黒い革のコートでその恰好を目立たないようにしていたが、彼女はめざとくわたしを見つけ、金をせびった。自分たち貧乏学生の窮状を訴え、病気の友のために連帯を呼びかけるものだったが、わたしが断ったので、その娘は床に唾を吐き、乱暴に立ち去っていった。学生をかたって金をせびる手合いがいると聞いていた。彼女もそれだろうと思ったが、あるいはほんものの学生だったのかもしれない。

CV

パリにいる日本人の質の悪さ。ベッドの相手を求めて、夫ある身の韓国女人性に誘いの電話をかける国際大学都市の留学生（彼は韓国ではいまなお姦通罪があることを知らないのだろうか）。レクリエーションであるは

ずのソフトボールの試合で、血相を変えて審判に食ってかかり、強引に自軍から審判を出させた、ヤクザのような少林寺拳法の道場主（彼が率いるチームは優勝し、優勝杯と賞金を受け取る彼の写真が、日本人向けのミニコミ紙に載った）。もちろんそんな日本人ばかりではないが、パリにいるとそういう人種ばかりが目につく。彼らは例外なく、同じ東洋人種である中国人や韓国人、ヴェトナム人やタイ人、ラオス人たちに対して横柄、冷淡であり、フランス人に対しては卑屈である。

CVI

カルチエ・ラタンの映画館で観た北野武の『ソナチネ』——崩壊感覚、というより自己破壊衝動。昔の日活映画に出てきた紋切り型のヤクザに、極私的なサド・マゾヒズムが加わった、私小説的「映画」。この暴力はセックスの代替物にすぎない。現代日本の危うさ、不安定さを感じる。日本全体が神経症に罹っているのではないかとさえ思われる。男をクレーンで吊り上げ、水中に沈める場面がある。引き上げたが、まだ生きていて、男は命乞いをする。観客席から笑いが起こる。もう一度沈めて、男を殺す。観客席は静まり返る。フランス映画ならばここで相手を助けるだろう。観客の沈黙には不快感がこめられているようだった。もう一度沈めて殺し直すというのは、フランス人の感性に合わない。道徳ではなく、感性に。

CVII

『ソナチネ』のこの殺人場面で十一年前のモンプリエでの素人芝居を思い出した。ポール・ヴァレリー大学の各国の留学生が集まって演劇祭を催した。わたしも請われて、上役にいじめられる日本のモーレッツ社員の役をパントマイムで演じた。はじめの台本では絶望した社員は上役の目の前で首を縊ることになっていたが、わたしがその恰好をして見せても、観客は一向に納得しない。終るに終れない。上役が部下に謝る恰好をして見せてはじめて、観客席から拍手が起こった。この国での芝居の締めくくり方は

こうでなければならぬのだと、妙に納得したものだ。『ソナチネ』にはこの救いがない。救いがないばかりでなく、一方的に自己破壊的なナルシズムを押しつける。それも、三島由紀夫のような知的で美的なもののかけらもないナルシズムだ。

CVIII

十四区に新たにオープンした現代アートの展示会場でアラーキーの写真展を観る。これもまた、神経症に罹った日本を象徴するような写真群。日本の猥雑な日常をいかにもそれらしくとらえたモノクロ写真。どこか北野武に似た破れかぶれの虚無感。商品化された日本女性の裸体をながめるフランス人たち。女の顔も裸体も縄縛りもすべて安物。ただ物干し台の上の空と雲だけがほんものの東京の空と雲。アラーキーは風景写真にすぐれている。苦渋に満ちた抒情性に溢れている。裸の女のいない日常風景にこそ、彼の真骨頂がある。あとはただどうでもよい私的な日記。こんな私的なものを読まされる方はたまらない。

CIX

四月。初夏のように暑い日——パリを訪れた人は日本に帰って、パリの春は暑かったと言うだろう。冬に戻ったような肌寒い小雨の日——パリを訪れた人は日本に帰って、パリの春は寒かったと言うだろう。場末のカフェでギャルソンから冷たくあしらわれた人は、フランス人は冷たいと不平を洩らすだろう。繁華街のカフェでギャルソンから温かく迎えられた人は、フランス人は親切だったとよろこぶだろう。わたしたちはいろんなところで知らず知らずにこういった誤解を重ねている。パリの季節は当てにならない。わたしたちの肌に染みついている四季の感覚は捨てなければならない。日本の四季の尺度はここでは通用しない。パリジアンは、少なくとも観光客を相手にするパリジアンは、すべて金、金、金である。金のない東洋人にたいする彼らの冷淡な目を見るべきである。年寄りだけが親切だ。

これはどこの国も同じか。

CX

芳香と悪臭——パリを象徴する二つの臭い。地下鉄の通路ですれ違うフランス人女性の香水の匂い。いままで嗅いだこともないよい香りだ。階段を降りると溝から酷えた小便の臭い。これも日本では嗅いだことのない臭いだ。十六区のきれいに飾りつけられたチョコレート屋のショーウィンドの真下に、いましたばかりといった犬の巨大な糞が横たわっている。リヨン駅のBNPの自動引出機の下ではアル中の乞食が物乞いにすわっている。貧富の差は想像以上に大きい。モードと芸術の都。それはパリのほんの一面にすぎない。芳香よりも悪臭の方が強いのだ。恐るべきは、この悪臭ではなく、この悪臭に次第に慣れてくるという現実だ。人はやがて無意識裡に器用に路上の糞をよけ、地下鉄のアンモニアの臭いを香水のように嗅ぎ、乞食やアル中に目をとめなくなる。エッフェル塔やサクレ・クール寺院に目をとめなくなるように。

CXI

六月九日。日本のY新聞欧州版に「列島梅雨入り」と題して、日本列島が八日に梅雨入りしたことを報じる短い記事が写真入りで載った。写真の前面には大きくアジサイの花。若い女性三人がふり返って笑っている。モノクロのこの写真を見て、赤紫のその色が、葉の濃い緑が、あざやかに目に飛び込んでくるようだった。はじけるような女性たちの笑い声も聞えてきそうだった。パリに梅雨はない。梅雨はなくてもアジサイは花ひらく。花屋の店頭に大きなアジサイの花をいくつも見た。梅雨のない国のアジサイの花は女王のように堂々としていた。雨に打たれる花の風情というようなものは、ここには微塵もない。アジサイは乾いた初夏の青空の下で、着飾った伯爵夫人のように威厳をもった美しさであたりの花々を支配していた。

CXII

早朝のアムステルダム中央駅。朝食を取るため奥のカフェテリアに入る。人もまばらな店内の通路側のソファに、日本の若者が二人、無遠慮に足を投げ出し、煙草をのんでいた。あまりの行儀の悪さに、ボーイがやってきて注意したが、二人の若者は知らん顔。アムステルダムには麻薬目的でヨーロッパ中から若者たちが集まってくる。件の二人の若者はそんなヨーロッパの若者を気取っているのか。崩れ方が半端、中学生が不良をまねているように見える。早朝の駅前広場はかすかに霧がかかって、人影はない。激んだ運河の水の臭いがする。木組みの出た細長い建物は傾いて互いに凭れ合っている。高級ホテルの横にとめられた観光バスのフロントガラスは割られ、いたるところにスリがいて。銀行や駅の両替所から受け取る紙幣にも偽札が紛れ込む。あの日本の若者二人がどンドン落ちるところまで落ちて行って、少しは甘さがなくなれば、アムステルダムまで来た甲斐があるというものだ。

CXIII

パリの夜景の美しさは、その照明の巧みさにある。建物や樹木に当てる光を最大限効果的にするため、他の不必要な照明はすべて排除している。それだけではない。その必要最小限度の夜間照明をさらに効果的にするため、光度を落とし、赤みを帯びさせている。思うに、これは蠟燭の明かりの延長ではないだろうか。こういった仄かな明かりは街路ばかりでなく、室内でも用いられる。フランス人の夜の部屋のなんと暗いことか。そんな薄明りの中で彼らは夕食を楽しんでいる。フランス人の家庭に夕食に招かれ、そういった夕闇に近い中で食事をしていると、子供の頃のことが思い出されるようだった。停電した中でよく蠟燭の明かりを頼りに夕食を囲んだものだ。あの頃の懐かし静けさがよみがえってきた。もっとも、暮れそうでなかなか暮れない、白夜に近い夕空のたゆたいは、まったく違っていたが。

CXIV

フランスの電気スタンドは背が高く、電球は上を向いている。天井を照らして、その反射する間接光で部屋を明るくさせる。そのため光は強く、はじめのうちは綿埃が焦げるような臭いがする。いったん天井に当たって跳ね返った光は、和らげられ、拡散して、光源がどこにあるのか分からないような、曖昧な明るさになる（強い光源が直接目に入らないように笠で遮られているが、もちろんその笠は日本のものとは逆向きになっている）。揺らめくような光の響きを浴びて、食卓のワイングラスに微妙な影が浮び、ワインがきらめく。肉や野菜やチーズも不思議に温かな光に包まれて、匂いもこまやかに、いやでも食欲をそそられる。会食者たちの間に親近感が流れ、会話も自然に弾んでくる。むしろ文学や芸術の話をしたくなってくる。日本の蛍光灯に照らされ、紫色に変色した肉料理をながめていては、とてもこんな気分にはなれない。

CXV

フランスに来てもっとも変わったのは、水を飲まなくなったこと、トイレに行かなくなったこと、そして一日中立ちづくめというこの三つである。水を飲まなくなったためにトイレの回数が減ったのは自然の理である。立ちづくめは靴の生活のため。公園のベンチなどは年寄りと恋人たちに占領されていて、歩き疲れてすわる場所といえばカフェの椅子くらいしかない。すわればギャルソンがやってきて、何か注文し、金を払うことになる。払いたくなければ一日中立っている他はない。水を飲まない——飲料水が有料だからというのではない。乾燥したこの国では、汗をあまりかかない。したがって喉が渇くということがそれほどない。体を洗うにもシャワーで十分。洗濯物もそう出ない。降雨量の少ない国では少ないなりにうまくできているものだ。水の使用は少なくすすむようになっている。

CXVI

再び水の使用について。フランス料理と日本料理の最大の相違点は、料理に大量の水を使うかどうかという点である。水が貴重なこの国では水をあまり使わずにすむ料理が発達した。水の代わりにワインを料理に使う。パンにしてもそう。パンを作るのにそれほど水は必要としない。これにたいて、日本料理は主食の米からして大量の水を使う。飲料水で米を研いでしかもその研ぎ汁を何度も捨てる。みそ汁、うどん、そば、ラーメン、皆そうだ。代表的な日本料理である刺身や寿司にしても同じ。水で魚を洗い、まな板も何度も水で洗う。もし水がなければ、日本料理で出来上がるものなど一つもないのではなからうか。肉をワインで煮る料理との相違がここにある。水がなければ、それも大量になれば日本料理はできない。水ともう一つ、強火の直火であるガスの火力。フランスの電熱器では御飯も炊けなければ麺類も作れない。上は半ナマ、下は焦げた御飯が出来上がり、スイッチを切ってもいつまでも熱い電熱器では麺類はすぐのびてしまう。

CXVII

シテ・ユニヴァーシテール
国際大学都市の日本館。明治の頃、サツマ・ジロハチという、パリに住む日本の放蕩息子が大金を投じて建てたので、別名サツマ館とも言う。気のいい、少々お人好しのフランス人夫婦がコンシエルジュをやっている。ホールは暗い。館長室前に敷きつめられた赤い絨毯が、かえってみすばらしく見える。居住者の八割近くが日本人。若い留学生が多いが、彼らはあまり挨拶をしない。ホールの閲覧室には新聞社の厚意で日本の新聞が置いてある。皆それぞれ押し黙って読み耽っている。ここにも、パリの中に、小さな日本人社会がある。部屋は汚い。破れたところはベニア板でふさがれている。共同の台所はもっと暗く汚い。誰も彼もが、暗黙裡に互いに相手を監視し合っているような、そんな陰気な目つきをしている。夜中に騒ぎ立てる手合いもいない。墓地のように整然と静まり返っている。目に見

えない自己規制がどこかで働いていて、誰もが窮屈に息をひそめているように感じられる。こちらが陽気で開放的なイタリア館に住んでいるので、よけいそう感じるのかもしれないが。館長はいつもきちんとしてネクタイを締めている。責任感の塊のようにも見えるが、実際はかなり無理をしているのではあるまいか。館長夫人は一日も早く日本へ帰ることだけを考えているような、そんな顔つきで買物袋を下げて舗道を歩いている。

CXVIII

日本館のM君。最上階にアトリエをもつ日本の美大生。ある夜、そのいかにもアトリエらしい彼の部屋で酒を飲んで話をした。そばに若い女性ピアニストがいた。同じ日本館に住む日本の大学教師の夫人。夫は自分をほったらかしにして、友人と飲みに行っていると不平をこぼす。M君は才気煥発な人だが、そんな素振りは見せない。なかなか面白いことを言う。人を見る目がややシニカルだ。アトピーがひどい。家族の話聞きながら、そのアトピーの原因を指摘してやると、彼は興味深そうにさらに突っ込んだ質問をしてくる。自分が選ばれてパリに来ていることに、逆にコンプレックスを抱いている。エリートにならざるを得ない自分自身を嫌っているふしがある。あからさまではないが、他の居住者たちと一線を画しているように見えた。最後に彼が言った言葉が妙にひっかかった——「山中さんも、日本に帰って、僕と会っても、知らん顔するんじゃないですか」友人たちとの間に一線を引くように、日本とフランスとの間にも彼は一線を引いている。その心の根底には、アトピーの原因と同じものが横たわっている。

CXIX

底冷えのする冬の夜。地下鉄のポン・マリー近くにあるパリ^{シテ・デ・ザール}芸術都市に住む日本人芸術家たちのパーティー。さまざまな境遇の人たち。さまざまな野心と絶望と才能を持った、年齢もさまざまなアーティストたち。フラン

ス人の男女も交え、にぎやかに立食パーティーがはじまる。ネジやボルトだけで巨大な昆虫を制作している人。彼は兄と仲が悪い。悪い奴だ、悪い奴だと繰り返す。なぜか彼はわたしを気に入ってくれて、記念写真のときには、彼に言わせればまるで「背後霊」のように、わたしのうしろに並んでわたしの肩越しに顔を出す。彼のグループ展を見る機会があった。五百羅漢をすべてネジとボルトで構成していた。不思議な静けさと不気味なざわめき。彼の怨念が身に迫ってくる。

CXX

カフェのギャルソンの横柄な態度。顎をしゃくって何にするかと訊く。お釣は投げてよこす。それにもやがて慣れてしまった。こちらが欲しいのは笑顔などではなく、カフェなのだ、カフェさえ飲めれば他のことはどうでもよいのだ、という気持ちに変わった。相手の態度や表情などをいちいち気にしていたらこの国では暮らしていけない。やがて、こちらもそういった態度や表情をしていることに気づいてハッとなった。銀行に入るとき、ガラス戸に映った自分の顔。警戒した目つき。日本人の顔ではない。個人主義というのはこういう顔つきを作り出すものなのか。孤独の中で自由を享受しながらも、知らないうちに皮膚の一番外側に、他者と自己とを分けるかさぶたのようなものができ、それで全身が覆われてくる。傷つけられるたびに皮膚は鍛えられ、一種の鎧のようなものが出来上がってゆく。カフェのギャルソンの態度を何とも思わなくなるのもそのためか。

CXXI

自由、平等、博愛。まず何よりも自由。平等よりも博愛よりも大事なものは自由。フランス人は自由を脅かされることをもっとも嫌う。殆ど制服らしいものがないのもその証拠の一つ。個人の自由を束縛するものには断固として戦う。他者の自由の尊重も、そういうところから生まれる。他者の自由の尊重は、当然平等という観念をもたらす。フランスには建前上、人

種差別はない。黒人も黄色人種も白色人種と平等に扱われる。博愛とは、言葉を換えれば連帯ということだ。平等の観念が根底になればこのような連帯感は生じない。この連帯感がストをもたらし、同じ連帯感によって、市民はストライキをする労働者や学生たちを支援する。ゼネストになって、日常生活に深刻な影響が出てきても、である。この連帯意識がなければヨーロッパで生きてゆくのは困難となる。そのことと個人の自由との間に些かも摩擦を生じないのが、これがフランスの伝統というものか。

CXXII

パリで絵を描いていることは、パリでは何の宣伝文句にもならない。至極当然のことである。ところが日本に一時帰国して、個展をひらくと、パリ在住であることが、絵の価値を高めることになるらしい。人はそこにパリ——たいていの場合それはフランスとイコールなのだが——の匂いを嗅ぎ、陶醉する。当の画家自身は、パリでは東洋的な画家と言われているにもかかわらず。マルセイユからペルピニャンへ行くとスペインの匂いがし、マドリッドからバルセロナへ行くと南仏の匂いがするのと同じ現象がここにある。

CXXIII

藤田嗣治。同時代の画家たちの中ではめずらしく垢抜けした、きわめて西欧的な絵を描く画家と言われている。しかしパリで彼が成功したのは、その絵の東洋性のためであった。その描線と黒の日本的な特性のためであった。藤田嗣治に日本人は西欧を感じ、ツグハル・フジタにフランス人は東洋日本を感じ、日本人は彼を日本の偉大な洋画家の一人に数え、フランス人は彼をフランスのエコール・ド・パリの特異な画家の一人に数える。

CXXIV

パリの植物園の一劃に恐竜博物館がある。発掘された恐竜の骨を復元し

たもので、圧倒的な迫力がある。骨は恐竜のものばかりでなく、マンモスや鯨、始祖鳥その他多くの哺乳類、爬虫類の骨が組み立てられ並べられて、その骨格が手にとるように分かる仕組みになっている。わたしが目を奪われたのは、ホルマリン漬けの人間の胎児であった。猿の胎児のとなりに並べてあったが、ただの胎児ではない。死産の奇形児を集めたものだった。目が一つの胎児、頭だけが二つある胎児、目や口がない胎児などが、これでもかこれでもかというように並べてある。わたしはヨーロッパ人の執拗なほどの科学的態度に脱帽した。これらの陳列ケースをながめていると、対象を科学的にみつめる彼らの冷厳なまなざしが身に迫ってきて、奇形の胎児よりも、その目のほうにゾツとなった。いかなる感情的情緒の同一化も行わない強い精神力。ダ・ヴィンチやレンブラントの解剖画が思い起こされた。これら奇形の胎児を冷静にみつめる目、明治以来日本が学ぼうとしたのはこの科学的な目であった。

CXXV

フランスの食文化の高さは、料理の見た目の美しさや味の美味しさだけでなく、食器やグラスの美しさにもよく表われている。フォークやスプーンひとつ取っても、ヨーロッパの伝統を感じる。手に伝わる重さ、口に持ったときの唇に当たる感触、日本のものとはまったく異なる。なかでもわたしが美しいと感じたのは、ワインの壺の姿だった。テーブルにワインの壺が置いてあるだけで、その姿の美しさに見惚れ、簡単に飲んでしまうのがためられるほどだった。それをフランス人たちは無造作に開け、なみなみと注いで、あっという間に空にしてしまう。その光景もまた、一種の爽快さを伴っていて、フランスを感じさせた。空になっても、ワインの壺には独特の詩情があった。佐伯祐三が床に跪いて拝んだ気持もよく分かる。

CXXVI

ソルボンヌ大学サール・リシュリユー。イタリア喜劇コメディア・デ・ラルテの名優の演技。爆笑に次ぐ爆笑。しかしわたしの目の前の東欧系の学生は舞台には目もくれず、しきりにスケッチブックに女の絵を描いていた。若いきれいな娘の絵が、やがて髪をふり乱した凄まじい形相の老婆の絵に変わった。彼は赤鉛筆を取り出し、口を大きく耳まで裂けさせ、豊満だった美しい乳房をしなびた皺だらけの乳房に変え、そこにも血糊のような赤い色をこすりつけた。この青年は母親を憎んでいると思った。東欧からきた留学生なのだろうか。無表情なその顔が心に焼きついた。

CXXVII

大江健三郎。彼のノーベル賞受賞を、わたしは国際大学都市の日本館でのパーティーの席上で知った。館長夫人がやや興奮した面持ちで入ってきて、いま日本から届いたニュースだと言って、彼の受賞を出席者たちに伝えた。軽い歓声が上がった。館長夫人は得意気だったが、大江健三郎がほんとうにノーベル賞に値するのか、わたしには疑問だった。というより、そもそもノーベル賞自体にどれほどの価値があるのだろうかという思いだった。日本では大騒ぎだろう。日本になくてよかった。

CXXVIII

大江健三郎のノーベル賞受賞後、わたしはできるだけパリの書店をのぞきまわったが、彼の本は一冊も見かけなかった。かろうじて、カルチエ・ラタンの一劃にある文学書専門の書店で、平積みされた彼の本をみつけることができた。麗々しくノーベル文学賞受賞と帯文で飾られていたが、一時間ほど観察していたけれども、手に取る客は一人もいなかった。若いフランス人学生に尋ねると、彼らはミシマの名しか知らなかった。カワバタもタニザキも知らなかった。オオエの名は知っていたが、読んだことはないという。

CXXIX

オペラ座近くのパリ国立図書館裏にある韓国レストラン。いつもここで一人酒を飲んでいる日本人研究者。彼は山岳信仰を研究していた。いつ行っても一人。そして酔っている。彼は若い頃、韓国女性との結婚を両親から反対され、また大学への就職のこともあって、彼女との結婚を断念し、日本人女性と結婚したが、彼女の面影が忘れられず、毎晩こうして韓国女性が集まるこのレストランにきているという。「二十五年間」と彼は言った。二十五年間忘れられないという。韓国旅行のさい、家族からお土産に頼まれたチマ、チョゴリを買ってきたときは、ほんとうにつらかったとも言った。

CXXX

サン＝ジャック通りにあるホテル「ソフテル」。半地下にある日本レストランが開くまでロビーで新聞を読んでいると、旅慣れた日本人観光客が「エクスキューズ・ミー」と言って、わたしの前にある椅子を持っていた。フランスの新聞を読んでいたので、わたしを日本人だとは思わなかったのだろう。別の日、やはり同じ場所で新聞を読みながらレストランが開くの待っていると、今度は団体の日本人観光客の一人——若い女性だったが——が何も言わずいきなりわたしの前の椅子を持ち去って、向こうで仲間たちと甲高い声で談笑しはじめた。わたしは隣のアメリカ人と顔を見合わせて苦笑した。また別の日、同じ場所で年配の日本人男性と話を交わしたことがあった。その人は日本で青少年の教育問題に携わっていて、ちょうどその問題を扱ったわたしたちの翻訳書が出たばかりだったので紹介すると、大変喜んでくれて、異国で一人で研究や勉学にいそしんでいる姿は頼もしい、頑張ってくださいと言ってくれたが、彼の頭の中には明治以来の「留学」のイメージがあったのだろう。フランスで勉強することそれ自体は大したことはないのに。

CXXXI

裸の王様。かつて群衆は彼が裸であることを指摘する勇気を持っていなかった。その結果、世界は大量殺戮の時代へと向かっていった。現在、群衆は彼が裸であることにすら気づいていない。裸であることを見抜けるはもう一人もいなくなってしまった。ジャーナリズムが先頭に立ってその提灯持ちをやっている。文学もその例外ではない。本物と贋物を見分ける能力は、その直観力は、若者に特有のものであったはずなのに、彼らから真っ先にその力を失いはじめている。偽善者と狂信者と民族主義者と拝金主義者と安っぽい虚無主義者と享楽主義者とが跋扈する。かくして政治と宗教のファシズムを無意識裡に期待する土壤が出来上がった。

CXXXII

ノスタルジー。いまそこにはないものへの情熱。この曖昧な対象への憧憬という情熱は、フランス人には理解できないものだ。大革命という明確な形で国家が出来上がり、フランス語という明晰にならざるを得ない即物的唯物的言語によって、この国家を支える彼らには、観念的にしか理解できない類のものだ。これを体感的に理解できるのはドイツ人において他にない。彼らの国家は曖昧に出来上がったものであり、言語においても同じである。いまそこにはない国家、そこにはない言語を求めて、なおもまだやみがたい憧憬の思いを抱いている彼らにおいてこそ、ノスタルジーは存在する。しかしこれは病的なものであり、専制主義的なものの萌芽を含んでいる。

CXXXIII

午前零時。フランス文化放送のその日最後のニュース。女性アナウンサーがいきなり「オ・ジャポン……」とはじめた。日本のニュースがトップで扱われることは殆どないので、何事かと耳をそば立てた。日本時間の十七日午前五時四十六分ごろ、京都、大阪、神戸で大きな地震があったという。詳細は分からないが、相当の規模であったようだ。地震発生後二時間

余りでフランスに第一報が届いたことになる。翌朝、Y新聞社の友人の事務所に行くと、ライバル紙をひろげて、友人は「負けたね」と言った。確かに第一面の現場写真はライバル紙のほうに迫力があつたし、地震の被害状況がよく分かるものだった。Y紙はパリ在住の日本人のために早速号外を無料で配った。号外は日本人がよく行くオペラ座のラーメン屋などに置かれて、食事もそっちのけで、日本人たちが食い入るように読み漁っていた。『フィガロ』も『リベラシオン』もトップニュースとして写真入りで大きく報道していた。死者の数は日を追って急増していった。こういった情報から、日本の一大都市が関東大震災以来の災害によって壊滅状態に陥った、という第一印象を受けた。それなのに、パリを訪れている日本人観光客がのんきに買物を楽しんでいるのが不思議でならなかった。真剣に受けとめていたのは、フランス在住の日本人たちだった。離れて暮らしていると、祖国のことが異常に気にかかるものだ。このような未曾有のことがあればなおさらだ。日本は滅びると言ったフランス人もいた。精神的にはもうとっくに滅びているのだが。

CXXXIV

明日のことなど誰にも分からない。明日も生きているという保証はどこにもない。それなのに人は明日も明後日も自分は生きているのだという、曖昧な確信の下に日々を送っている。明日早朝の大異変で自分は死ぬのだと思って床に就いた人など、おそらく一人もいなかったろう。皆、明日のことを思いながら床に入り、死んでいった。未来は、一瞬先のことで、不可知である。それにもかかわらず人は既知のものとして生きてゆく。そうでなければ瞬時も生きてゆくことはできない。じつは生きてゆくということ、それ自体が確実に一歩一歩死に向かっていることなのだが。来るべき死を不問に付して、人は生きてゆく。

CXXXV

単に偶然の連続にしかすぎないものを、何か特別に仕組まれた必然の繋がりや信じる人たちがいる。その「特別なもの」を、自分たちを救済してくれる神の啓示と見做す人たちは、神秘宗教の信者と呼ばれ、その「特別なもの」を、自分たちを迫害する目に見えない恐ろしい力と見做す人たちは、被害妄想の精神病患者と呼ばれる。必然の意識が昂じると、人は己も他人も不幸にする。偶然にとどめておけば、多幸感もない代わりに、絶望も狂気もない。ただ空虚感があるばかりだ。すべてが偶然で成り立っていると考えるくらい世界が退屈に見えることはないが、必然の狂信に比べれば精神は健康である。

CXXXVI

シャルトルのスタンドグラス。独特のその青。赤との比類ない調和。ヴァレリーは複雑な飲み物と言った。宝石を細かく砕いて顆粒状にした、光の飲み物。あるいは「天国の柘榴の種」(ヴァレリー)。スタンドグラスは不純物が混ざるほど美しい光彩を放つという。ちょうどわずかの悪臭を加えることによってさらなる芳香を放つ香水のようなものだ。スタンドグラスを外部からながめると、錆と埃で見られたものではない。汚れくすんで墓石のようだ。ところが内部に入ると、昼は夜となり、太陽光線は綺麗星の光芒に一変する。外部の醜と内部の美、不純の加わった純粹、個と全体の関係——キリスト教ならずとも、こういった二重の相を何かに譬えたい誘惑にかられる。しかしやめておこう。自然現象を十二分に利用した人工的さわるこの光のモザイクには、どこかに人間を陥れる陥穽が仕掛けられているような気がしてならないから。

CXXXVII

ヴァレリーはマラルメの文章をスタンドグラスに譬えた。主題の無意味と断片の神秘、夢想、そして深さ。わたしならばそれにもう一つ付け加え

るだろう——虚無。高いところにひろがるこの虚無の輝きは、同時に底なしの深淵の不気味さを思わせる。この空間を支配できるのは天使のみだ。

CXXXVIII

深夜、サン＝ミッシェルからタクシーに乗って帰る。カルチエ・ラタンの裏通りを走り抜けるとき、路地の石畳を振動で感じた。タイヤに響く摩滅した石の音がからだ全体に伝わった。はじめて体験する響き。何とも言えない体感。藤村は東京は声の街だが、パリは響きの街だと言った。しかしその響きは外側から聞いた馬車や自動車の走る音だった。わたしは車の中で石畳の響きを、振動として聞いた。夜の深さと静寂と、言い知れぬ郷愁と孤独とを同時に感じた。冬の孤独でありながら、不思議にこの孤独は温かかった。

CXXXIX

パリ郊外。ソー公園の桜。フランスの桜は殆どが濃いピンクの八重桜。この公園の桜も例外ではない。しかしこの桜の佇まいは他のどこよりも美麗で見事。緑の芝生に整然と並び立つ姿は、日本の桜と趣を異にする。太い幹の途中から突然四方に枝分かれしていて、幹が中断され消失してしまったような、根を逆さに見ているような、異様な感じを受ける。そのこまかく分かれた枝々に豊かに花をつけ、重みで枝が垂れ下がっているのかとさえ見える。幹の途中からの枝分かれはフランスで見るとどの桜も皆同じで、これは気候風土のせいかと思っていたが、じつはどれも病害虫にやられた結果だと教わった。ともかく、それでも花はまごうかたなき日本の八重桜である。いや、見事にフランス化した日本の桜である。その樹の下で敷物を敷いて日本人が花見をしていた。雨が降って肌寒かったにもかかわらず、傘をさして、重箱には海苔巻き、卵焼き、酒は日本酒。地面にじかにすわることが、日本人の自然に帰る手取り早い方法なのだ。大地と一つになって、花と一つになって、輪を作った仲間と一つになって、そうや

って日本人は古くから民族の歴史を生きてきた。パリにいても、それは同じ。フランス人に笑われようが、好奇の目で見られようが、お構いなく、彼らは彼らの文化を生きているのだ。わたしも同じだと思いたい。

CXL

ノーベル賞について。日本人はノーベル賞にたいして異常に高い関心を示す。戦後間もなく湯川博士が受賞したときの特別の思いが、まだ連綿とつづいているのかとさえ思われるほどだ。パリ大学にはノーベル賞受賞の研究者がいくらもいる。学生たちはそのことを特別なこととは思っていない（もちろん研究者として尊敬は払っているが）。米国では、ノーベル賞受賞者でも研究業績が振るわなければ、遠慮なく研究費が削られる。ノーベル賞そのものはそれほど大騒ぎする賞ではない。ノーベル文学賞について言えば、翻訳の問題が殆ど考慮に入れられていない。わたしはノーベル文学賞の少なくとも三分の一は翻訳者にあたえるべきだと考えているが、ともかく、よき翻訳者にめぐり会えなければ、いかに優れた作家・詩人でも世界的には無名のままである。さらに、受賞へ向けての周囲の働きかけや、選考そのものについても一考の余地があるかもしれない。最近、『ル・モンド』紙がその特集記事を出したようだ。いずれにせよ、権威に弱い、特に“国際的”と呼ばれるものの権威に弱い日本人の特性がよく表われた賞である。

CXLI

春のリュクサンブル公園。薔薇が、チューリップが、パンジーがいっせいに花咲く。これらの花々を引き立てる美しい芝生。この国の芝生は真冬でも冬枯れしないが、やはり春がもっとも緑の美しい季節。日本の春と異なるのは、蝶を思いのほか見かけないということだ。蝶だけではない。いったいに昆虫をあまり見かけない。蟻すら這っていない。緯度の高いこの国では、植物だけでなく、虫も種類が少なく、これが公園を清潔に感じ

させる一因かもしれない。虫のいない園生——幾何学的に刈り込まれた叢^{ボス}林とともに、フランスの公園を人工的に見せているもの。快適さと不自然さ。矛盾する二つのもの。外観の美しさと社会化された自然のよそよそしさ。ブローニュの森にでも行かなければ生の土の匂いに触れることはめったにない。水の匂いもそうだ。湿気を好む東洋人種のわれわれには、最後までなじめない、洗練という名の冷たさ。

CXLII

生と死の双曲線。この二つの曲線は絶対に交差しない。生は限りなく死に近づくが、死に触れることはない。人が死を感じる時、まさしくそれゆえに人は生の領域にいる。誰も死を体験することはできないのだ。自分はもう死ぬのだと、生の世界で覚悟する。彼はまだ生きているのだ。苦しかった呼吸が楽になり、意識が失われたとき、ようやく死の扉の前に立つ。しかしまだ弱々しくも心臓は動いている。心臓が止まり、脳波がいかなる波動も描かず平坦になったとき、そのときはじめて人は死の扉を開ける。だからそのときその人はもはやその人ではなくなり、単なる腐敗しつつある肉の塊にすぎなくなる。末端の細胞だけがまだ生きていて、例えばなおも髭や爪が伸びたりする。この髭や爪が、彼がこの世に生きていた最後の証しなのだ。死んだあとまで伸びつづける髭や爪——これだけが生と死の双曲線において唯一例外的に交差し得る一点なのかもしれない。

CXLIII

ロダンの『手』。初対面のリルケに向かって、ロダンは両手を差し上げ、彼の彫塑と同じ恰好をしてみせ、これが「創造」だと言った。いままさに組み合わせられたその両の手からものが生まれ出ようとしていた、とリルケは妻宛の手紙で語っている。身体の一部としての手ではなく、手それ自体で完結している宇宙——ロダンの『手』。パンと葡萄酒と石の生活の中で忍耐強く営まれる芸術家の創造行為。職人的技術と根気と、芸術家の

直観と詩情とが、類稀なる夢を結実させる。常に苛立ってわめき散らす神經症の妻の傍らで。ロダンがサン＝テックスのように災厄の大地から逃避しなかった。災厄の大地に腰を据え、微動だにしなかった。石のように。

CXLIV

季節はめぐる。冬枯れの公園にもいつしか若葉が萌え出て、春が戻ってくる。死を待つばかりの病者は、己が死んでもそれとは無関係にめぐる春を、どのような目で見ているのだろうか。そこに救いを感じるのか、それとも絶望を感じるのか。愛のただなかにある恋人たちはこの春の再生をどのような目で見ているのだろうか。繰り返しめぐってくるこの季節の永遠性を、自分たちの愛の永遠性に重ね合わせるだろうか。それとも、やがて愛が終り二人が別れても、それでも変わらず訪れる春を、妬ましい思いでながめるのだろうか。人類の誕生以前から春は繰り返しめぐってきた。それは地球が太陽の周りをまわっているからに他ならない。地球の公転がとまり、太陽が消滅する——それは確実にやってくる。そのとき、春はもうめぐってこない。およそこの世に永遠というものはないのだ。

CXLV

自殺。ひとたびこの観念が人の頭に棲みつくと、それは固定観念のように執拗にまといつく。たとえ永らく忘れていても、必ず何かの拍子で意識の表に現われ出る。そのとき、人が考えるのは自殺の方法だけである。自殺するかしないかではなく、また残される家族や仕事の後始末などでもなく、自殺の方法それだけが唯一の関心事となる。どうやって死ぬか——自殺のことを思うとき、考えるのはそのことだけである。苦しまず確実に死ぬ方法、それを模索する。方法に迷っているうちに、結局その時機を失ってしまう。そうやって自殺の観念は無意識の領野に深く潜行してゆき、次の機会を窺うことになる。何度かこれが繰り返されたあと、ある日、何事でもないようにあっさりと実行される。

CXLVI

交通事故死。突発的に起こるこのようなアクシデントでは、家族が死に立ち会うことはあまりない。事故に遭って救急病院にかつぎ込まれた者が、もし意識があったとすれば、この世で見る最後の人間は、白衣を着た医師である。この世で聞く最後の人間の声は、白衣の人の声である。もし口が利ければ、死にゆく人がこの世に残す最後の言葉は、自分の姓名、住所である。彼の死は事務的に処理される。そこには一滴の涙もない。悔やみの一言もなく死者は霊安室に移される。自分一人で死んでゆく——この孤独には崇高さが漂う。交通事故死の半分は無意識裡の自殺であるという精神分析医の言葉が、この崇高さを裏付けている。見知らぬ白衣の人を見上げながら、どこの誰とも知らぬ者として死んでゆく。事故死という名の自殺。

CXLVII

わたしが住んでいる^{シテ・ユニヴェルシテール}国際大学都市のイタリア館には、若い盲目のイギリス人女性がいる。彼女は黒眼鏡をかけ、白い杖をついているが、それ以外は普通人と少しも変らない。杖を頼りに階段を昇り降りし、外のスーパーに一人で買物にも行く。胸を張って堂々と、まっすぐ歩いてゆくその姿は美しい。彼女を見ていると、目が見えないことは、手の指が一、二本欠けている程度の障害にしか思えない。いつものカフェでコーヒーを飲んでいると、買物袋をさげた彼女が横断歩道のところに立っているのが見えた。信号が青に変わって、彼女は無事車道を渡り終えた。ところが、シテの出入口を間違えて、行きすぎ、さらに先のガラダラの上り坂をのぼって行くこうとしていた。わたしは車道を横切って、彼女のそばまで小走りに走ってゆき、自分は同じイタリア館の住人だが、あなたは道を間違っている、もっと手前で曲がらなければいけない、と教えてやった。彼女は軽く礼を言って、行きすぎた出入口まで引き返し、もう一度笑って礼を言った。その微笑はまざれもなく清潔な若々しい娘のそれだった。

CXLVIII

エクス。セザンヌのアトリエ。日陰になった湿った前庭。狭い入口。アジサイのような大きな葉が鬱蒼と茂っている窓の裏庭。木造の粗末なアトリエ。歪んだ窓枠には埃がたまっている。冬の寒さを思う。チューブ入の絵具さえ凍りつく寒さを。テーブルには彼の静物画を模して林檎が数個並べてあった。どれも腐っている。あまりにも長い制作のために、とうとうモデルの林檎が腐ってしまったというエピソードを、そこに再現してみせているのだろうが、山小屋のような粗末なアトリエの腐った林檎に、むしろわたしはセザンヌの生前の苦悩と不遇を思った。彼はあのゾラからさえも理解されなかった。道を歩くと子供たちから犬のように石を投げつけられた。腐った林檎が黄金の林檎に変わるのに少なくとも五十年は必要だった。エクスの夕暮——日が落ちると急に寒くなる。夜は雨になって、わたしは風邪を引いた。またあのアトリエの冬の寒さを思った。

CXLIX

ある人がどこかで書いていた——パリ滞在中の島崎藤村の文章のどこにも、パリのアパートマンのことが出てこない、はじめてヨーロッパを訪れた日本人がまず最初に驚き、圧倒されるのは、パリのアパートマンの高さ、大きさ、美しさなのに、と。藤村がパリにいながらアパートマンをまったく無視しているのは、わたしには分かるような気がする。日本を追われた孤独者には、偉容を誇るヨーロッパの首都のファサードなどどうでもよいのだ。彼の目にはそんなものは映らない。人々の住む建物の立派さ、美しさに驚き、憧れ、あるいは圧倒される旅行者は幸福である。パリのアパートマンのことなど一行も書かない藤村に、かえってわたしは藤村の孤独の深さを感じる。自分とは関わりのない世界が厳然とそこにある。ただそれだけにすぎない。

CL

冬のパリにいと、イタリアに行きたくなくなる。灰色の空がづく憂鬱な季節だからでもあるが、そればかりでなく、パリに思いのほかローマが生き残っているからでもある。古代ローマの伝統がパリの街のあちこちに残っているからだ。藤村はパリを「近代のローマ」と呼んだ。世界中の文化が流れ込んでくる中心地という意味の他に、彼はこの都市にローマの遺跡を見たのだらうと思う。古代ローマの文化の伝統が形を変えて息づいている姿をこの都市に見たのだらう。リルケの妻は絵の勉強のためにパリにきたが、パリにきて、ますますローマに行きたくなくなった、と夫に打ち明けている。夜、イタリア館の自分の部屋のベッドでまどろんでいると、隣の共同食堂でイタリア人たちが陽気に歌う声が聞えてきた。その明るく澄んでよく響く「ラ」の音に、わたしはナポリやヴェネツィアの空と海の青を思った。むしやうにイタリアに行きたくなくなった。パリの道はすべてローマへと通じている。

CLI

あざやかな若草色のセーターを着た日本の女——列車はやがてヴェネツィア駅に着こうとしていた。女は車窓の外にひろがる海を、通路の折り畳み椅子にすわってじっとながめている。彼女は海をながめているが、思いは別のところにあるといった表情をしていた。親切なヨーロッパ人の男性が、空いたわたしたちの前のコンパートメントの席を指して、こちらにすわたらどうかと勧めたが、彼女は弱々しく微笑んで断った。わたしは妻と娘と三人でこしかけていた。わたしたちの前の席はすべて空いていた。しかし彼女は相変わらず車窓の外をながめている。若く美しい女性。服のセンスもよかった。一人旅しかかった。ヴェネツィアへの若い女性の一人旅。あらゆる関係を絶つために旅に出て、すべてを清算したいといった顔つきで海をみつめている。わたしは「あること」を想像したが、それはヴェネツィアを旅しているという、こちらの旅愁がただ単に働いただけの、

勝手な空想の産物だったのかもしれない。

CLII

しゃがむ——日本の大学などで、学生がよく廊下や中庭にしゃがんでい
る光景を見かけるが、ヨーロッパでそんなふうにはしゃがんでいる姿はあま
り見かけない。スペイン広場やオペラ座前の階段にこしかけていることは
あるが、地面にじかにしゃがみ込むことはない。じかにしゃがみ込んでい
るのは物乞いだけだ。ヨーロッパ人は立っている。どんなに疲れていても
立っている。その姿は彼らの強烈な自我を思わせる。彼らは立っている、
一輪の薔薇のように。日本の若者は集団をなしてしゃがんでいる。たがい
の弱い自我をいたわり合うかのように、彼らはしゃがんでいる、地面に直
接に、張りついたように、集団で。そう、湿り気を帯びて散り敷いた桜の
花びらのように。

CLIII

毎朝地下鉄を乗り継いで、ブローニュにある私立のフランス人学校へ
子供を送っていった。ある朝、ブローニュ＝ジャン・ジョレス駅でアク
シデントがありブロックされているのでその駅は通過する、という車内放
送があった。ブローニュ＝ジャン・ジョレス駅はわたしたちが降りる駅
だった。その駅を通過するとき、徐行する列車の窓から、ホームに頭から
血を流して倒れている男が見えた。次の終点で降りて地上に上がったが、
ここは何度かきた町だったにもかかわらず、学校へ行く方角が分からない。
通りかかったフランス人の老婦人にたずねると、近くまで案内してあげる
からいっしょに來なさいと言ってくれた。パリでこんなに親切にしてもら
えることはあまりないので、ちょっと驚いた。何しろこちらは子供連れの
得体の知れない東洋人だ。誰も関わりを持ちたがらない。やはりパリでも
昔の人は親切だ。いっしょに歩きながら、老婦人はパリは物騒になった、
自分がパリにやってきた娘時代はこんなに危なくなかった、パリは変わった

と嘆いた。彼女の娘時代とは五十年以上前のことらしい。

CLIV

服装について。フランス人はあまり他人の目を気にしない。カバンがぼろぼろであっても、眼鏡のレンズが割れていても、たとえそれがうら若い女性であったとしても。無精髭など誰も何とも思わない。制服を嫌うフランス人にとっては、郵便局員も銀行の窓口係も地下鉄の運転士も、皆思い思いの自由な服装で仕事をしている。外見で人を判断しない。一方で、世界中から多くの移民難民が流れ込んでくるこの国（特にパリ）では、得体の知れない危険な人物がいたるところにいる。安全な人物との区別は多くの場合、その服装でなされる。無精髭を生やし、汚いジーンズをはいた東洋人種であるわたしは、たいていうさん臭い目つきで見られ、レストランに入っても冷遇される。背広にネクタイで地下鉄に乗ると、途端に物乞いがやってくる。外見で判断しないというのは、フランス人同士の場合だ、と思いたくなる。

CLV

他人の目を気にするか、気にしないか——これは恥の文化と関係がある。フランス人にとって恥ずかしいことと、日本人にとって恥ずかしいことは根本的に相違している。フランス人にとって恥ずかしいこととは、国を売ること、国の恥辱となることをなすこと、連帯しないこと、市民としての義務を果たさないこと、政治に関心を持たないこと、である。日本人にとって恥ずかしいこととは、妙な服装をして笑われること、へたな意見を言われて軽蔑されること、恋愛を人から見られること、である。フランス人にとって決定的に恥辱となるのが、日本人にとってはそれほどのものでなく、日本人にとって堪え難い恥となるのが、フランス人にとってそうではないのは、国家の成立や体制の歴史がまったく異なるからだが、また父系家族社会であったか、母系家族社会であったかの違いもあるのだろう。

ともかく、フランス人も含めて外国人にとってもっとも恥ずべきことは、国歌や国旗に対する侮辱だが、こういうものに対する日本人の無関心は外国人にはまったく理解できないものだろう。

CLVI

パリに住む友人の画家は「日本的な」画家として知られている。洋画家ではあるけれども、彼の絵の空間の取り方、構図、色彩、線はフランス人画家の間では浮世絵のようだと評されている。その友人の画家は年に一度、日本で個展を開く。画廊の案内状には『パリの匂いのするモンマルトルの画家、マロニエとセーヌの旅情』と刷ってある。日本で彼の絵の人気は、その「フランス的」なエレガンスにある。現代日本画家のうちでもっともフランス的な画家とさえ評されている。わたしはフランス国内での彼の絵の評価をよく知っている。フランスでどれほど「日本的」と評されようとも、日本に帰れば「フランス的」「パリの」と見做される。どれほど洋風の絵を描いても、フランスでは「日本的」「浮世絵的」と形容される。それほど西洋と東洋との間には越え難い深淵が横たわっているのだ。

CLVII

マラルメに『小唄Ⅱ』と題するソネットがある。あまり研究者の注目を惹かない小品で、注釈らしいものも殆どない。しかしこの詩は、表題から想像されるほど軽いものではない。ここに聞える森の小鳥の残響は、死に近い何ものかを表わしている。原詩の音の響きからしてすでに凶々しい余韻を漂わせている。この詩は真実恐ろしい。フォンテーヌブローの森を訪れたときのことを思い出す。樹木の高さとお行ききの深さとみなぎる静寂にしばらく圧倒されたものだ。物音一つしないこの別世界に、わたしはしばらく佇んでいた。すると突然、一羽の鳥が空高く飛び去っていった。その鳴き声は、まるで弔意を表わすかのように、鳴き終わったあとの沈黙の中にいつまでも鳴り響いているように思われた。マラルメは死の近いことを予

感じていたのではあるまいか。この森を訪れて、はじめてこの詩の絶望の深さが分かったように思われた。絃が切れてしまったオルフェウスの豎琴の悲しみが。

CLVIII

パリの夜——暗渠に流れ込む泥水とルビー。古都の夜はボードレールの昔から殆ど変わっていない。希望や野心を抱いて世界中から集まってくる若者たち。挫折したその姿。吹き溜まりのような場末のカフェの一角。売春婦にアル中の女。夜の繁華街のにぎやかさと裏町の侘しさ。夜のパリの街に疲れたとき、わたしがやってくるのはセーヌ川のほとり。色づいたプラタナスの葉に白っぽい照明が当たり、その枝葉のむこうに水のきらめきが見える。静寂と冷たさ。ノートル＝ダム寺院の黒い塊。ボードレールの昔から少しも変わらない聖なる場所——セーヌ河畔。心の救いは数十メートル先にある。あのきらめく水の内懐に。

CLIX

生まれること、愛すること、死ぬこと——この三つに共通するのは、ごく平凡な一般的出来事でありながら、きわめて個人的な特殊な出来事である、という点である。言うまでもなく、生も愛も死も誰しもが経験するありふれた出来事である。出生届、婚姻届、死亡届にそれは象徴されている。役所の係員は、印鑑登録を受け付けるときと同じ顔つきでそれらを受理する。それらはやがて統計的に処理され、出生率、婚姻率、死亡率として表わされる。しかしわたしが生まれたこと、わたしが人を愛したこと、わたしが死ぬことは、わたしだけの問題である。わたしの人生の出発点であり、通過点であり、終着点である。誰一人として、これらを肩代わりすることはできない。いかに多くの恋愛論を読もうとも、自己の愛の指標にはならず、いかに多くの死の哲学書を読もうとも、自己の死の心構えにはならない。

CLX

人はある日死ぬ。その日から明日はもう訪れない。明日が今日になり、今日が昨日になっていった時間の流れは、ここで止まる。その人の歴史がそこで停止する。鼓動が停止した瞬間に、個人の時間も停止する。あとは、無である。すべての解体であり、あらゆるものからの解放である。わたしにも必ずその日がやってくる。病死であろうが、事故死であろうが、自殺であろうが、必ずその日はやってくる。その日からもう明日はやってこない。これは人生の完遂などではない。いかなる形の死であろうとも、その死は人生の突然の中断を意味する。オルフェウスの豎琴のように、それは突然に鳴り止むのだ。白鳥の歌が歌える者は幸せだ。しかしそのような幸福者は稀である。殆どが自分の人生の突然の中断を悔やみながら、諦め切れないまま、諦めたポーズを取って死んでゆく。

CLXI

パリの地下鉄でコオロギが鳴いている——そんな話を日本人から聞かされてきた。ある夜、右岸のキャトル＝セプタンヴル駅のプラットホームで、この虫の音を聞いた。まぎれもなくコオロギの鳴き声だった。日本のコオロギとまったく同じ音色で、構内の暗い線路の端で鳴っていた。秋も深まり、はや初冬かというこの季節に、構内の暖かさのせい、コオロギは盛んに鳴き競っている。この虫の音に耳を傾けているのは、わたしひとり。他には誰も注意を向けていなかった。鳴いていることにすら気づいていないようだった。それは慌ただしい日常の中で耳を傾ける余裕がないからではない。フランス人の耳には虫の音が機械の雑音と同じに聞えるためだ。コオロギは、遠く日本を離れたわたしのためだけに鳴いてくれていた。

CLXII

パリの街を歩く——旅行者を自然に歩かせてしまうものが、この街にはある。それが何なのか、はっきりとは分からないが、とにかく秩序と無秩

序とが奇妙に緋い混ぜになった不思議な都市だ。美しい公園，綺羅びやかな商店街，多種多様な人種，中世以来の古い建造物の連なる地区，超近代的なビル群の立ち並ぶ一劃，観光客が群がる名所旧跡があるかと思えば，真昼でも麻薬の売買を行っている移民街があり，フランス内外の学生たちで陽気ににぎわうカルチエ・ラタンの東隣には，精神病院の町とチャイナタウンがある。ふと見上げた建物の壁には，ここで『フランス語の擁護と顕揚』が起草されたと銘打たれた金属板が光っていたりする。この道路を横切ろうとしたときに，ロラン・バルトは洗濯屋の車に轢かれたのか，と一瞬巖かな気持になったり，夕食後，散歩がてらに立ち寄った古本屋の向かいのアバルトマンが，かつてブラックのアトリエがあったところだったりする。荷風が，藤村が，横光利一が，金子光晴がいく度となく歩いたかもしれないリュクサンブール界隈の路地を，わたしも歩く。『リラ』や『クーポール』などより，こういった名もない路地（パリの路地にはすべて名が付いているが）の風情に，昔日の文学者たちの面影が忍ばれる。パリはおそらくその頃から寸分も変わっていないことだろう，その光も影も。

CLXIII

シャン・ド・マルスにほど近いセイト画廊でクリムトのデッサン展を観る。ほの暗い部屋で赤みを帯びたライトが作品を照らし出している。客はそれほど多くない。クリムト独特の繊細な線がためらいがちに女体の輪郭を描き出している。世紀末ウィーンのエロスとエレガンス。百年近く前のデッサン画だが，その瑞々しさは驚くばかり。大胆なポーズを取るモデルの不思議な可憐さと羞恥。絵とは美を表現するものだ，という殆ど陳腐に近くなったこの言葉を改めて認識する。脇毛や陰毛をあらわにし，太腿を開いて寝そべっていても，クリムトの筆はその姿態を「絵画」として定着させる。すなわち，ワイセツを「エロス」に，デカダンスを「エレガンス」に昇華させるのだ。

CLXIV

ギメ美術館。オクシダントルなものに疲れたとき、心は自然にオリヤントルなものを求めて、足はいつしかギメ美術館に向かう。イエナ広場に面した建物の小さな階段を昇ると、狭い受けがあった。室内はほの暗い。この狭さとはの暗さに心安らいた。東南アジアの仏教美術、特にカンボジアの仏頭に惹かれた。瞑想的な半眼、微笑する口元。静謐なこの顔を見てみると、パリ生活でこびりついた垢がきれいに洗い流されるようだった。自分がまぎれもなくアジア人種であることを確認した。シヴァ像の躍動する肉感的な姿には、東洋というよりは熱帯を感じた。インド美術、中国の陶器類、朝鮮の宝石類と見てまわり、最後に日本美術を収めた小さな一室に入ったとたん、いままでの東洋美術にはない、まったく異質ななものかを感じた。肌で感じるとしか言い様がなかった。あえて言えば、菊の香りを嗅いだかのような錯覚に陥った。そこには能面があった。自分はアジア人種の中でも特殊な日本人種であることを痛感した。外に出ると、往來の建物と道がやけに白っぽく光って、素っ気なく見えた。

CLXV

日本の国語学者や国文学者は国外に出たがらない。日本文化についての優れた研究が、直接本人を通じて海外に紹介されることが少ない。その理由はおそらく、外国語に堪能ではないからということだろう。これとは反対に、外国語ができるというだけで、外国人と数多く接触しているというだけで、国内の学者よりはるかに知識の浅い人たちが、あたかも日本を代表するような口吻で、海外で日本のことを紹介し、解説し、講じている。わたしの短いフランス滞在に限っても、このような人種を何人も見てきた。伝統的な日本を研究する研究者は、できるだけ海外に出かけて、自己の研究成果を、国際学会その他多くの機会をとらえて発表すべきだろう。したり顔をした半可通の素人学者が、流暢な外国語で誤った、あるいは不正確な伝統的な日本を広める弊害を防ぐためにも。

CLXVI

ジュスユーのバリ第七大学には日本学科があり、なだ・いなだ氏と故森有正氏のお嬢さんがおられる。なだ・いなだ氏のお嬢さんは和算の研究者で、そのときは出産のため長らく休職した後、復職されたばかりだったので、産褥の疲労がまだ顔に残っているようだった。故森有正氏のお嬢さんは活動的な筒袖の木綿を着て、精力的に書道を教えておられた。顔がよく似ている。間接的に聞いた話だが、父親が館長を務めていた日本館のあるバリ国際大学都市には一度も行ったことがない、行きたくない、という。その話を聞いて、さまざまなことを思った。森氏にも格闘や葛藤があったように、その家族にも同じものがあったのだろう。お二人とも父親のことは話したくないそうだ。外国生活には他人には窺い知れないいろんな深淵がある。

CLXVII

パリにいる日本の若者二人。一人はいつも車で事故を起こしている青年。彼が日本からもってきた唯一の本が、偶然にもわたしが共訳者の一人として名を連ねている翻訳書だった。彼はわたしに身の上相談があると言っていたが、約束の場所に来たことがなかった。そのうち連絡が途絶えてしまった。もう一人の若者は、名古屋の放送局で働いていたという女性。わたしに名前と電話番号を書いた紙切れを手渡してくれたが、電話番号はでたらめだった。名前も実名かどうか分からない。いままでも、そうやっている男性に紙切れを手渡してきたのだろう。この二人の若い日本人の将来について考えてみた。暗澹たる気持になった。

CLXVIII

エッフェル塔の下に立つ。足元から見上げる。鉄のレースの貴婦人も、ここでは単なる建築現場の足組みにしか見えない。日本のある若い仏文学者は胎内にいるイメージだと言ったが、わたしには、ただ風が吹きすさぶ

だけの、鉄の足組みにしか感じなかった。バルトの記号論的なアプローチも、あまり実感としてはぴったりこなかった。物売りの黒人が玩具の鳥を飛ばしている。そのカタカタ、カタカタという無機質な音が、不思議にこの広場に似合っていた。曇天の寒い午後、さすがに観光客の姿も少ない。玩具の小鳥を子供だけがながめている。ノートル＝ダム寺院はその壁に手を触れたいが、この塔はただひたすら見上げるべき建造物。フランス人の機知と無味乾燥な冷淡さの象徴。

CLXIX

崩壊の時代。政治の崩壊、そのあとにきた経済の崩壊。はるか以前にはじまっていた文化芸術の崩壊。個人レベルでは家庭の崩壊。その穀寄せを食らった教育の崩壊。崩壊、崩壊、崩壊……。日本でのオウム真理教の事件はこれらと無関係ではない。中心を喪失した人間の心の中に入り込んで増殖していったウイルス。阪神大震災で一国の首相をはじめ右往左往する大人たちを目の当たりにして、子供たちは精神的拠り所を失った。小学生の首を切り落した中学生の事件は、この精神的右往左往と無関係ではない。ヨーロッパも不況のどん底にある。フランスの大学生の失業率は二十五パーセントだという。麻薬と暴力は小学生にまで広がっている。アムステルダムの中駅には得体の知れない若者たちが薬を求めてたむろしていた。やがて終わろうとする二十世紀。二十一世紀への展望はまったく開けない。精神の地平の先に見えるのは、崩壊の果ての瓦礫の山だけ。

CLXX

毎日のようにパリの街を歩いた。一日中歩いて、夕方戻ってきて、夕食後部屋で本を読んでも、こうしているのが何か勿体ないような気がして、夜八時か九時にはまたオーバーを着て外出した。パリは、朝も昼も夜もめずらしかった。何度も目にしている光景なのに、すべてがはじめて見るもののように目新しかった。それは日々刻々、表情を変える都会風景の

ためだった。しかし、こんなことをしてよいのか、という思いもあった。他の真面目な日本人留学生や研究者は、昼間は足繁く国立図書館に通い、夜は自室で研究論文に没頭している。わたしはというと、何もしていない。ただ浮浪者のように（あるいは犬のように）あてもなく路地から路地へとうろついているだけ。そのことをパリの友人に漏らすと、「哲っちゃんはそれでいいんだよ」と慰めてくれた。慰めであり、励ましの言葉でもあった。パリ市中を歩き、観察するのが、わたしの役目か。ネルヴァルのように。

CLXXI

クレティユにあるパリ第十二大学には日本人学生は一人もいない。そこで思いもかけず日本語で呼びかけられた。ふり返ると、あきらかに東洋系との混血と思われるフランス人の女子学生が立っていた。彼女の名前は「ジュン」といった。母親は日本人という。完璧なバイリンガルであるのはそのためか。ある日、浮かない顔の彼女に出会った。どうしたの、と訊ねると、日系企業に勤めている父親が鹹になりそうだという。人員整理で、まずフランス人からやめさせようとしているらしい。不況の深刻さがこういうところにも表われている。人種の問題もまた。ジュンとはそれ以来会っていない。別の大学に行っているのかもしれない。クレティユの町は冷たくよそよそしかった。あきらかに東洋人を嫌っていた。冬の風は冷たく、樹木も湖も建物も素っ気なく横を向いていた。典型的な保守的ブルジョワの町。

CLXXII

ドイツ精神は「ねばならぬ」でできている。フランス精神は「てもよい」に包まれている。アウトバーンの構造性と機能性はこの「ねばならぬ」と整理整頓の結晶体だ。一方、道路標識もない凱旋門のロータリーをぐるぐるまわりながら、ぶつかる車が一台もないのは、この「てもよい」に守ら

れたフランス人の融通性、柔軟性、秩序なき秩序のおかげだ（もっとも、別の面では彼らは頑固この上ないが）。ゼネストでフランス中が麻痺しても、社会が混乱して收拾がつかなくなるということはない。暴動があらうとテロがあらうと、街は「何も変わらない」。ドイツ精神の強さと脆さが「ねばならぬ」にあるとすれば（ナチズムがその極端な例だが）、フランス精神の軟弱さとしぶとさは「でもよい」に表徴されていると言ってよい。「こうでなければならぬ」と「こうであってもよい」——不思議なことに、庭園の作り方はそれとはまったく正反対なのだが。

CLXXIII

すべて形あるものは滅びる。消滅は一つの救いである。これはいつかは滅びるのだ、と思えば心は安らかになれる。社会のシステムも、社会そのものも、それを構成する人間も。

CLXXIV

人類の叡智はたかだか数千年の価値しか持たない。「無」の概念ですら人間が作ったものだ。巨象からバクテリアに至るまで、これら生物は「無」を知らずして「無」を実践している。遺伝子は連綿と続いているではないか、と反論されそうだが、遺伝子情報は個体と同じではない。その巨象は、そのバクテリアは、もう二度とこの世には現われないのだ。樹木が美しいのはそのためだ。その樹木はこの世でただ一本しかない個体なのだ。昆虫も植物も貝も藻もすべてそうだ。人間よりもそういったものの方がはるかに愛しいのはなぜだろうか。

CLXXV

原口統三は紅茶一杯でどんな夢でも見ることができた。病的な潔癖の下に熱烈なロマンチズムが潜む、少年と老年が同居した男。「詩人」を嫌った、もっとも詩人らしい男。二十歳で「人生」が終ったと悟った男。彼の一杯

の紅茶の中にそれがすべて凝縮している。潔癖も、ロマンチズムも、少年も、老年も、詩人も、人生も。もし彼がパリにきたなら、なんと言っただろうか——「この国の人たちの掌はどれも、乾いている」とでも言っただろうか。大連と紅茶。アカシアとロシア語。彼はこの夢の国から一歩も出ることにはなかった。二十歳で人生が終っても仕方なかったろう。このように終わる「人生」を持ち得た者は幸運だ。終ろうにも終り得るだけの人生を持ってない者が大部分なのだから。

CLXXVI

モンテーニュ、ラ・ロシュフーコー、ラムネー、サン＝テグジュペリ。フランスモラリストの系譜。人間の心性を深く知れば知るほど、ベシミストにならざるを得ない。もちろん、自分自身をも含めて。あとは陽気であるか陰気であるかだけの問題だ。陽気なベシミスト——それは道化の別名に他ならない。陰気なベシミスト——それは哲学者の別名。自殺するかしないかは、この陽気、陰気とは何ら関係がない。陽気なベシミストたる道化でも自殺する。陰気なベシミストの哲学者が八十歳まで生き延びることもある。問題は、人間の本性に突き当たった者がオプチミストになった例がない、というこの事実である。オプチミストに見える場合でも、それは必ず宗教という（あるいは宗教的な）欺瞞的仮面をかぶっている。

CLXXVII

カルチエ・ラタンの一劃。陽当たりの悪いじめじめした汚い路地を歩いていて、ふと立ちどまって建物を見上げると、重たい扉の上の壁に金属板がはめ込まれていた。何気なく読んでみた——「一五四九年、デュ・ベレーとロンサールはここにおいて、『フランス語の擁護と顕揚』を起草した」フランス文学史上の大事件がこんな裏さびれた隘路の片隅で起こっていたことに驚くとともに、ここがパリであることを実感した。パリとはこういう街なのだ。ルイ十六世とマリー・アントワネットの首が刎ねられた広場

を無数の車が行き交い、バルザックとボードレーが邂逅したセーヌ左岸の道を人は散策し、マネがその野外音楽会を絵にした公園で、子供はクレープを食べながら人形劇に見とれ、ネルヴァルが首を縊った場所でプロンプターが台詞を教える。ゴチック様式の大聖堂の下にローマの遺跡が眠り、さらにその下にはエジプトのイシス神が祀られている。歴史は重層的に存在し、その表層を現代という時間が流れてゆく。わたしもまたそのひとコマ。

CLXXVIII

日本人がどんなにヨーロッパ社会に順応しようとしても、それには限界がある。日本人はヨーロッパ人にはなれない。せいぜいヴェトナム人かカンボジア人だ。逆に言えば、ヴェトナム人かカンボジア人になるつもりで生活すれば、ある程度まではヨーロッパ社会でやってゆける。もしそれが嫌なら、日本人でありつづけ、そうやって孤立し、日本人だけの集まりの中で不平不満をぶつけ合いながら、帰国することだけを考えることだ。しかし、もうそうなのは、そこはヨーロッパ社会ではなく、ヨーロッパ社会の中に一種異様な小さな日本人社会ができただけの話になる。日本の狭い地域の争いをパリに持ち込むだけのことだ。つまらない話だ。心の中に「日本的なるもの」を持ちつづけながら、外見上はヴェトナム人かカンボジア人と間違われながら、卑屈にならずに生きてゆくこと——それがヨーロッパ社会での日本人の生き方。

CLXXIX

春の午前。サン＝ミッシェル広場に面した書店「ジベール・ジョゼフ」で、店頭に出されていた分厚い豪華な美術書を買おうと、BNPの小切手を切ると、店員はうさん臭げにわたしの顔を見て、ちょっと待ってくれと奥にひっ込んだ。上司と相談しているらしい。やがて上司が現われて、身分証明書を見せてほしいと言った。証明書を見せると、何度も調べたあと

で、ようやく納得したらしく、さきほどの店員に目くばせした。店員はレジを打ちはじめた。この証明書で認めてもらえなければ、大学教員の職業証明書を見せようかと用意していたが、その必要はなかった。なぜこのように手間取ったかと言えば、わたしがみすばらしい身なりをして、目つきが悪かったからだ。風体に似合わぬ高価な本をもとめようとしていたからだ。どこかで盗んできた小切手を使っているのではないかと疑ったのだろう。いつものことだった。

CLXXX

グラン・パレでプーサン展とカイユボット展が開かれた。どちらにも長蛇の列。友人に誘われてプーサン展の列に加わったが、入口近くになって、その列がカイユボット展を見にきた客の列だと分かった。友人はがっかりしていたが、わたしは内心ほくそ笑んだ。こちらの方を見たかったからだ。カイユボットの絵画的というより映画的な、斬新でダイナミックな視覚(視角)を十二分に生かすべく、会場内にはバルコニーに面した窓が作られ、即製のそのミニチュアの窓を通して、彼の絵がむこうにながめられるようになっていた。その絵はむろん、バルコニーの窓から下をながめ下ろした構図の作品であった。この二重の窓を通して見た十九世紀末のパリの樹木と舗道には、不思議な魅力があった。虚構と分かっているながら、その虚構をしばらく実像としてながめていたいという誘惑にかられた。日本の展覧会ではこのような気のきいた演出はなかなかやってくれない。出口でカタログとヘンリー・ジェイムスの『パリスケッチ』を買った。外に出ると、シャンゼリゼのマロニエの木が午後の光を浴びて黄金いろに輝いていた。(会期が終ったあと、カイユボット展の入場者数とプーサン展の入場者数が公表されて、新聞は印象派が古典派を凌駕したと大きく見出しを出していた)

CLXXXI

午前中、イタリア館の図書室で買ってきたばかりのカイユポットのカタログをながめていて、ふと疑問が浮んだ。手前の傘を差した人物の衣服と、背後の雨空や濡れた舗道の、いったいどちらを先に描いたのだろうか、という疑問だった。空や道を塗ったあとに衣服の袖や裾を塗ったのだろうか。いや、どうもその逆のような気がした。カタログの写真ではよく分からない。もう一度グラン・パレに行ってみて確かめてみることにした。RERに乗って、メトロに乗り換えて、三十分ほどでグラン・パレ会場に着いた。目の前にカタログの実物がある。やはり思ったとおり、袖や裾を描いたあとに、空や舗道を描いている。その逆の部分もあったが、概ね想像通りだった。パリにいる有難さをしみじみ思った。確かめようと思えば、ものの三十分ほどで実物を見て確認することができる。カタログの疑念が一瞬のうちに晴れる。『ジョコンダ』や『ミロのヴィーナス』、ラファエロやプーサン、ドラクロワその他無数の名作も、見ようと思えばいつでもその実物を見ることができる。「パリ」というこの都市の名品については、言うまでもない。

CLXXXII

春になると、イタリア館の前庭にある低い木に、淡いピンク色の花が咲く。何の花だろうと、その前を通るたびに佇む。フランスの花木ではないような気がした。枝は曲がりながら横に広がり、花は桃のような、やわらかい優しげな風情を帯びている。ある日、67番のバスでイタリア広場に行くと、ロータリーになった広場のあちこちに、この淡いピンク色の花が咲いていた。十月にパリにきてから、ほとんど枯木のような姿ばかりをながめてきた。それらの木々に一斉に同じ色の花が咲いて、はじめてそれがイタリア館前の木と同じものであることを知った。イタリアの花かもしれない。南国の香りがしてきそうだった。東方の移民たちが多く住むこの十三区の中心街に、南国の佇いを見せるこれらの花咲く木々は、いかにもふさ

わしいものだった。精神を病んだ者に、ひとときの救いの時間をもたらしてくれそうな、美しい花木だった。

CLXXXIII

ある朝目がさめると、突然頭の中でフランス語の回路がつながっていて、それまで苦勞していたフランス語の長いセンテンスが、楽に理解できるようになっていた。それと引き換えに、日本語の単語を忘れていった。副詞や形容詞の、あまり一般的でないものをどんどん忘れていった（特に文章語）。「おしほり」という日本語が出てこなかったときはショックだった。日本の新聞の欧州版にエッセイを書いたとき、手元に辞書がなく、記憶だけを頼りに漢字を書いていった。「連翹」と正しく書けたときにはホッとした。日本人同士でも知らぬ間に「電話番号を下さい」とフランス語式に言い合っている。こんなとき日本では何と言っていたのか思い出せなかった（「電話番号を教えてください」という表現は、帰国間際になってはじめて思い浮んだ）。水分の少ない肉食中心の食事のためか、肌がざらつき、顔色が悪くなっていった。精神までがアグレッシヴになっているようでゾツとした。

CLXXXIV

十年ほど前バりに滞在していたとき、オペラ座通りに面した中国レストランで、たまたま国連大学の教授と隣り合わせになったことがある。そのとき彼は、いまは中華料理が流行っているが、そのうち必ず日本料理がブームになると言っていた。十年後の現在、彼の予言は見事に当たった。四季を問わず大挙して押し寄せてくる日本人観光客を相手に、さまざまな商売が繰り広げられるようになった。そして、以前とは比較にならないほど多くの日本レストランが軒を並べるようになった。持ち帰りのコンビニのような店までできた。日本関係の商売は、航空会社から邦字新聞に至るまで、その拠点をポルト・マイヨやシャン＝ゼリゼからオペラ座周辺に移し、ますます日本人の姿がこの界限に多くなった。それにつれて、ジブシーの

子供やスリも多くなった。長年住んでいる日本人ですら、オペラ座前のBNPの自動引出機から現金を引き出して外に出たとたん、カードをすられてしまったという。現金ではなくカードを狙ったところがみそだった。いわば盲点をついたわけだが、それにしても、住み慣れたはずの人ですら狙われてしまう昨今である。住み慣れているために、かえって急激に変わったオペラ座界隈の動きについてゆけなかったのかもしれない。日本料理ブームはカラオケとともに厄介なものをもたらした。

CLXXXV

ノートル＝ダム寺院はどの角度からながめても、それぞれに美しいシルウェットを見せるが、わたしがもっとも美しいと感じるのは、グルネル河岸からながめた姿だ。ここから見たカテドラルは、水と樹木と尖塔とが見事に調和している。二つの角塔の一部が隠れる、その隠れ具合も感じよい。秋の陽に、水の青と樹木の緑と石塔の色が微妙なニュアンスをもって、無音のハーモニーを奏でている。血塗られた過去の歴史の重みも、この絶妙な絵画的風景の中では、まるで伽倻のようなヴェールをかけられる。しかしこのロマネスクな幻想の流れに流されてはいけない。ユゴーの小説『三銃士』のように読んではいけない。阿鼻叫喚の巷で、うごめき、のたうち、はいずりまわる民衆を、歴史の流れの中で消えていったその姿を、そこに読み取るべきだろう。さらにパリという街そのものを。

CLXXXVI

“山に登った男”——これはモンマルトルで絵を売っている画家のこと。「あいつは山に登った男だ」という言葉は、画家として墮落した男だという意味。これを教えてくれた人は、そういった日本人画家の悪口を言う同国人の画家を唾棄していた。そうやってしか生活していけない画家たちのことを、奴らはどれほど分かっているのか、と酔った口調でわたしにおちまけた。フランス人の画商がついていて、フランスでも日本でも安定した

収入が得られる画家たちと、生活のために意に反してモンマルトルで似顔絵を描かざるを得ない画家たち。パリにはこうした二種類の画家がいる。絵画という同じ一つの世界にしながら、その在り様には天と地の違いがある。しかし——絵画はひとつ。絵を描くときは、それが一流画廊の壁を飾ろうが、観光客のトランクにしまわれようが、同じ絵を描いているのだ。絵を描いている以上、その人は立派な一人の画家である。

CLXXXVII

また例の山岳信仰の先生が一人で酔いつぶれている。そばで主人がたしなめている。六十近いこの店の韓国人の主人は、若い頃画家志望で、挫折し、いまでは韓国レストランの主におさまっている。店の壁には彼がかつて描いた絵が飾ってある。昔流行った白を基調としたアンフォルメル風の絵だが、さすがに素人離れしていた。彼の妻は精神を病み、アルコール中毒になって、十三区の病院に入院しているという。間わず語りに話すその主人の話に、神妙に聞き入る友人。となりでその夫人がワインを傾ける。夫人もまた同じくアルコール中毒で、分裂病に罹っている。彼女はただ黙々とワインを飲み、煙草をふかしている。まったく別の世界に入っている様子である。パリで地獄を見てきた、と帰国後人に話しても、理解してはもらえないだろう。

CLXXXVIII

死——乗り越えるべき二つの恐怖。死の身体的苦痛と死後についての精神的苦痛。前者では安楽死という最後の手段が残されている。しかし後者は未だ解決されていない。死んだ後どうなるか、という永遠に未解決の問題。これが解決されたなら、誰も死を恐れなくなるだろう。むしろ進んで死にたがる人間が増えるだろう。その意味では永遠に未解決の問題であったほうがよいかもしれない。死後の世界について宗教はさまざまなことを説いている。しかしこれは信仰の問題である。信じるか、信じないか、二

つに一つの問題である。すべての人間を納得させることはできない。死後の世界は無である。なるほどそうだろう。それはそれでよい。だが、そもそもこの「無」とは何なのか。「無」というものが存在する以上、それは全き無ではない。般若心経はこの「無」すらもない、と説いている。「無」がないとはどういうことなのか。

CLXXXIX

銀行について。

フランスには預金通帳というものがない。月末に銀行から前月の取引明細書が送ってくるだけである。自動引出機から一日に引き出せる最大金額、一週間に引き出せる最大金額が決まっている。残高照会はその都度ボタンを押してレシートを受け取る。レシートを確認したらすぐに捨てる。暗証番号は三度間違うと、鉄製の蓋が閉まってカードが出てこなくなる（これを“食べられた”という）。暗証番号は四桁で銀行が指定してくる。覚えたらただちに通知書は破棄することと注意書きがついている。こういったシステムはすべて盗難予防のためである。一週間の最大引き出し額が決まっているので、万一カードを盗まれ、暗証番号を知られたとしても、一度に多額の現金を引き出されてしまう危険はない。一週間のうちに手が打てる。ブルーカード（カルト・ブルー）は食事や買物もできる便利なカードだが、二、三ヶ月後に信用を得てはじめて手にすることができる。それまでは、日本と同じような引き出し専用のカードしかくれない。ところで、日本では考えられないことだが、フランスでは毎月決まった金額（百フラン）が普通口座から貯蓄口座へと自動的に移されてゆく（これを“キャスカード”——「滝」という）。普通口座からまったく引き出さなくても、毎月百フランずつが口座から減ってゆく。ほうっておくと、残高ゼロになる。それでも自動引出機から現金を引き出せる。ただし、それは銀行からの貸し付けとなる。あとで高い利子とともに返済しなければならなくなる。普通口座の残高をいつも調べて、残り少なくなったら、銀行に電話して貯

蓄口座から必要額だけ普通口座へ移してくれるよう頼まなければならない。カードも含めて、口座の管理はすべて個人の責任である。銀行は何もしてくれない。

CXC

酒とイバラの日々。ボードレールの『悪の華』におさめられた酒の詩篇を読む。詩篇の底から、不敵な笑いを浮べた詩人の顔が浮び上がってくる。その顔が歪んで、中原中也の顔になり、さらにその顔が悲しげな太宰治の顔に変わる。皆、若死にした詩人、作家だ。「日本」という国を郷愁をもって思い起こす一夜。

CXCI

この石、この樹木、この鉄柵、このポスター、もう生涯に二度と目にすることはないのか。帰国して、日本の空港のロビーに降り立ったとき、玉手箱を開けた浦島太郎のような気持になることだろう。一年がただの一年ではなかった、という意味でも。

CXCII

デ・プロフォンディス
深キ淵ヨリ——死者のために祈り給え。安らかな永眠のために。しかしまた、生者のためにも祈り給え。生きながらにしてこの淵に佇む者のために。この世界の方が彼方の世界よりもはるかに深く、救いが無い。

CXCIII

動物を愛する人は寂しい人であり、訳もなく陽気な人は悲しい人である。常に群集に紛れている人は孤独な人であり、見境なく愛を求める人は誰からも愛されない人である。他人のために善意を施す人の底には罪責感があり、人間嫌いの裏には報いられた博愛の心がある。

CXCIV

演技——人生という舞台ではさまざまな演技を強いられる。いろんな役回りを演じなければならない。演技をやめるとき——それは死ぬときだ。

CXCV

冬のサン＝シュルピス教会。広場に面したカフェにすわる。バス停前。韓国人の旅行者がよく通る。日本人はあまり見かけない。カフェはフランス人の学生ばかり。本を読んだり、議論したり、書きものをしたり。何十年も変らないカルチエ・ラタンの風景。幾星霜を経た、古色蒼然とした石の教会がこの風景をながめている。プラタナスの葉はすべて落ちて、石畳を覆っている。バスが通るたびにかすかに舞い上がる。教会内部にはドラクロワの壁画があるが、いまは見る気分にもなれず、ガラス越しに小さな広場をながめているだけ。表通りのサン＝ジェルマン大通りのにぎわいが嘘のような、静かな裏町の一劃。ここにこうしてすわっていると、十数年も前からパリにいるような気になってくる。あらゆる異物を受け入れる、この街の奥深さのおかげだ。異物はやがて滓となってその底に沈澱してゆく。沈澱して二度と浮び上がらない。

CXCVI

家庭教師の大学生ソフィーがオー・ソンファの『スカート風の風』をもってきて、これを知っているかと訊いた。本のタイトルだけは知っているが、読んだことはないと答えると、彼女は本の内容について説明したあと、なぜ日本人と韓国人は仲が悪いのかと質問した。難しい質問だった。戦前戦中の植民地政策だけでは説明がつかない問題だった（中国も台湾も東南アジアも植民地だった）。大陸文化が日本に移入された当時、文化的先進国として朝鮮半島は畏敬の念をもって見られていた一方で、半島の一部はすでに百済という形で、日本の大陸進出の前進基地となっていた。地縁血縁において、また同文同種という意味でも、この二つの国は互いにもっとも

近い関係にあった。そこから近親憎悪的な感情も生まれただろう。食事のときに器を手を持って食べるか、置いて食べるかというこの些細な習慣にも、二つの国のこだわりが窺える。二国間のぎくしゃくした関係には、戦後処理の不手際、日本の経済進出、キーセン旅行など、大小様々な理由があるだろう。パリでも、もっとも多く知り合いになれたアジア人種は韓国人だったが、同時にわれわれ日本人をもっとも嫌っていたのも韓国人だった。わたしはパリにいて韓国（あるいは朝鮮）に不思議なノスタルジーをおぼえたが、彼らは日本にたいして同じ思いを抱いたことがあるのだろうか。ないのではあるまいか。ともかく、はっきりしていることが一つだけある——韓国（あるいは朝鮮）にはすでに失われた古い日本の面影が残っている、ということだ。

CXCVII

日本のY新聞社の現地販売責任者を務める友人を囲んで、仲間たちと飲んでいたときのこと。ある一人が冗談めかして、酔っ払ってベンチで寝てそのまま凍死したら、日本の新聞に記事が載るだろうか、と友人に訊いた。友人は言下に、そんなことでは新聞には載らないと否定した。友人は二十代の初め、内戦中のレバノンで九死に一生を得て、その後パリに移り住んだが、パリでもさまざまな辛酸を舐め尽くしてきた男である。凍死など報じるに足りない瑣末事と思ったのだろう。確かに、たとえ相当の大学教授と言えども、パリではただの東洋人の旅行者、凍死してもフランスの新聞は見向きもしない。フランスの新聞が相手にしないものを、日本の新聞が報じるわけがない。友人にとっては、パリでの浮浪者や旅行者の凍死は何もめずらしいものではなく、日常的に起こっていることであり、東洋人だといっても、ここでは特別視されることはない。もっとも、ちょうどその場に居合わせなかった知り合いの特派員がその凍死体を発見すれば、身元とともに日本に向けて報じてくれるかもしれない。凍死したくらいではニュース・バリューにもならない、というこの現実こそ、いまのパリの現状

をもっともよく表わすものかもしれない。

CXCVIII

深夜、友人夫妻とサン＝セヴラン教会の斜め前にある日本レストラン「柳生」へ行った。食事が目的ではなく、地下のカラオケバーで歌うためだった。その夜——と言ってもいつものことだが——夫人はだいぶ酔っていた。わたしが鳥倉千代子の歌を歌おうとすると、夫人がマイクを横取りして歌いはじめた。友人がたしなめたが、委細かまわず、身振り手振りを交えながら（マイクのコードでテーブルのグラスを床に落して割ってしまった）、歌っているのか踊っているのか分からない有様だった。その姿をわたしはずっとみつめつづけていた。陽気なその姿とは裏腹に、夫人の顔は泣いているように見えた。

CXCIX

昼すぎ、デモで騒然とする中、サン＝ジャック通りの坂道をセーヌ川の方へ下りてゆく。パリ大学の地理学の重鎮ジャン＝ロベール・ピット教授の夫人に会うためだった。夫人は日本人で、名の通ったエッセイストで、パリに関するエッセーをよく日本の女性誌に載せていた。夫人——つまり戸塚真弓さんはもの静かにわたしをアパートマンの中に招き入れ、最初は紅茶を、そのあとはワインを出してくれた。わたしとの会話が次第に弾んできたのだろう。外の喧騒が嘘のような静かな室内だった。広い居間には観葉植物があり、落ち着いた大人びた雰囲気か漂っていた。話の途中で、中学生のお嬢さんが帰ってきた。「学校はどうしたの」と母親が聞くと、「先生がこないで休みになった」と答えた。先生もさきほどのデモ隊に加わっているのかもしれない。フランスの学校はやらなさすぎ、日本の学校はやりすぎ、その中間でちょうどよいのに、そう言って彼女は笑った。「水を買ってきて」と母親が頼むと、「重いからいや」と娘は断った。いまちょうど反抗期で、と彼女はわたしに言った。どこでも同じだな、パリでも。

わたしは苦笑した。

CC

身分の証明について。フランスでは身分証明書を携帯しないなど考えられないことだ。いつ、いかなるときに提示を求められるか分からない。これはフランス人、外国人の区別なく、すべての人間に当てはまる。この国では自己のアイデンティティーを常に意識して生活しなければならない（取り分け外国人は）。自分とは何者なのか、いかなる組織に属する者なのか、他者にたいして常に証明できるように心がけていなければならない。日本では、自己を証明しなければならない必要性は殆どない。銀行や役所で運転免許証を見せるのがせいぜいだ。日本人の自己認識の甘さ、社会構造の杜撰さは、この身分証明書の不携帯に如実に表われている。自己の証明は他人まかせであり、他人もそれほど相手に疑いを持たない。見知らぬ者が玄関口に立っていても、道を尋ねたいのかくらいにしか思わない。フランスでは、見知らぬ者は不審な男であり、泥棒である。この国では常に自分自身で自己を証明して見せなければならない。自己を完全に証明できなければ、警察のご厄介になることすらある。自己とは何者か——これは哲学的命題ではなく、社会的要請である。

CCI

犬との暮らし。フランス（特にパリ）では犬のいない生活など想像できない。ここでは、犬こそが最良の友。したがって犬は殆ど人間と同じ扱いを受ける。予防注射はもちろんのこと、犬の戸籍もあって、正式な呼称を役所に届け出る。家庭内ではそれとは別に愛称で呼ぶこともある。吠える犬は轡をはめられ、罰を受ける。町中で犬が人に吠えたり、犬同士で吠え合ったりしている光景を見たことがない。レストランではおとなしく椅子の下にうずくまり、立ち上がってテーブルに前足を乗せるようなことはしない。犬が最良の友であるのは、犬が主人に忠実で、決して裏切らないか

らである。それほどここでは、人間同士が孤独な関係にある。人よりも犬を信用する。肉親よりも。

CCII

シテ・ユニヴエルシテール
国際大学都市のレストランで家族で食事をしていると、目の前にすわっている男がいきなり娘のヨーグルトの蓋を開けて、一匙食べたあと、ちり紙を丸めてヨーグルトの中に突っ込んだ。「ここのはまずい」そう嘯いて傲然としている。妻は怒ったが、男は平気な顔をしている。彼の態度に尋常一様でないものを感じたので、わたしはあえて抗議せず、その様子を観察した。パリ大学をはじめ多くの学校を有するこの都市には世界各国からさまざまな人間が集まってくる。この東欧系の貧しい身なりの男は、そのうちの一人にすぎないが、やがて大学よりも病院の世話になるのではないかと危惧した。

CCIII

十一年前にパリへ行ったとき、アンカレッジを経由した。アンカレッジ空港で日本食の食べおさめにうどんを啜った。そこでは割り箸を使っていた。南仏滞在後、パリに来て、コメディー広場前のラーメン屋でラーメンを食べたとき、丸箸を使っていた。使い捨ての割り箸と何度も洗って使う丸箸。ここでは割り箸の方が贅沢なのだと知った。その頃はまだ日本レストランも数が少なく、ラーメンが食べられるのはパリではこの店だけだったように思う。値段も高く、レートの関係もあって、日本円で千円近くしたと記憶している。店員は横柄で、パリのことならお前たちよりよく知っている、というような顔をしていた。劣等感の裏返し of 優越感だが、今回はずいぶん様子が変わった。値段も安くなり、店員も謙虚になった。パリで生活すること自体がそれほど（と言っても十年前と比べての話だが）特別なことではなくなったためだろう。パリにいただけでエリートであった時代が、徐々に昔のことになってゆく。喜ばしいことだ。

CCIV

思いのほか広いサン＝トリニテ教会前の広場を横切って、坂道をのぼってゆくと、坂の途中にギユスターヴ・モロー美術館がある。マロニエの花が咲き乱れている。入口で恋人たちが待ち合わせをする日曜日。わたしは一人で館内に入る。アカデミーの重鎮であったにもかかわらず、彼の神話的象徴的絵画は、世紀末デカダン派や象徴派に大きな影響をあたえた。さらに彼は二十世紀絵画の代表的画家マチスやマルケ、ルオーの師でもあった。こういった枠の大きさ、奥行きが深さが、展示室に飾られた巨大なタブロー（まさにタブローと呼びたくなる代物だ）や戸棚に収められた無数のスケッチからでも如実に窺える。単なる絵具のしみが、どうしてこれほどまでに美しい宝石となるのか。午後の光の中で、わたしは時間の経つのも忘れて、スケッチ帳に見入った。いくらみつめても、その謎は解明されなかった。